

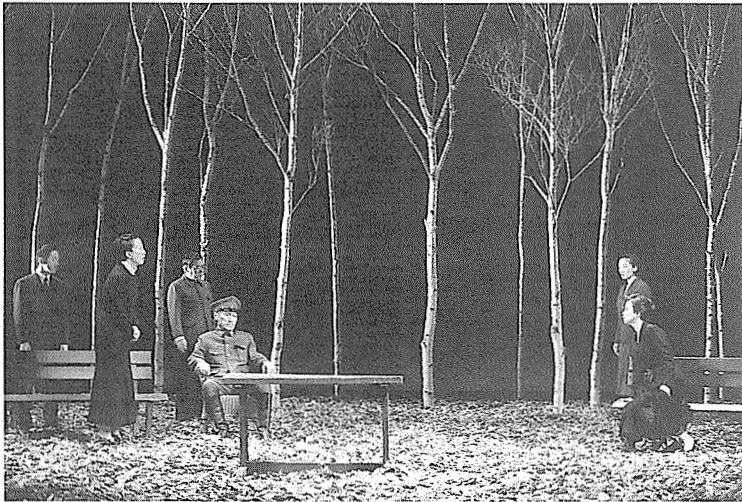
MARUMO LIGHTING NEWS



2000 MARCH

•VOL.85

- 「三人姉妹」の舞台照明 キム ヨンス ●第45回全国高等学校演劇大会 全国大会の開催に携わって 紙谷 邦弘
●第45回全国高等学校演劇大会 舞台照明から見た全国大会 安部 正則 ●奇妙なこと 松本 修
●表紙写真=世田谷パブリックシアター+シアタープロジェクトさっぽろ提携公演 筒井ともみ・脚本/松本 修・演出「三人姉妹」(撮影=宮内 勝)



『三人姉妹』の 舞台照明

キム ヨンス

(舞台照明家・文学座)

(『三人姉妹』第4幕/撮影=宮内 勝)

1月から2月にかけて『三人姉妹』(脚本・筒井ともみ/演出・松本修)の舞台照明に携わることになりました。

この作品はチェーホフの『三人姉妹』を翻案したもので、舞台を戦前の北海道に設定し、登場人物も日本人として描かれています。原作の人物設定やストーリーを踏襲しながらも、演出家によって創作されたイメージシーンが大胆に挿入されるなど、意欲的な舞台になっていました。

ここでは、この『三人姉妹』をとりあげながら、演出家と舞台美術家と舞台照明家がどのように、ひとつの作品を創りあげていくのかを紹介したいと思います。

演出家のイメージを伝える「照明プラン・メモ」

舞台照明家に限らず、舞台作品に関わるそれぞれのスタッフは演出家のイメージや意図を、どう具体的に舞台の上に実現していくのかということが基本的な仕事になります。

今回の『三人姉妹』では、舞台照明については演出家から「照明プラン・メモ」をあらかじめ渡されました。

そこには、各幕やシーンのイメージが簡単な言葉で書かれていました。たとえば、第1幕では“朝もや”“日の当たる居間→夕方へ”。第2幕では“夜間、外は雪”。第3幕の室内の場面は“白い部屋(写真スタジオのような)”。3幕の終わりになると“セピア色、モノクロームの世界”。第4幕の戸外のシーンでは“透明な空気感”といった言葉です。

この演出家のメモは、照明プランを考える時に一番のよりどころになりました。

この演出家と仕事をする時は、毎回こうしたメモを書いて渡してくれます。それは演出家自身が、文字にすることによって、自分のイメージをよりはっきりさせたいという意図があるのかもしれませんが、また、ひとつの単語や短い抽象的な言葉でも、それを文字にす

ることで舞台照明家をはじめ、他のスタッフにも、演出家が考えていることがよく伝わるように思います。

今回の仕事では、「照明プラン・メモ」に書かれた言葉から広がっていく演出家のイメージの大きな枠組みの中で、自分なりにイメージを膨らませ、具体的な明かりをつくりだしていったような気がします。できあがった明かりに対して、演出家からの大きなダメ出しもなく、自分なりに細かい直しを積み重ねながら仕上げていきました。

装置模型で提示された舞台美術

この作品の舞台装置は非常にシンプルなものでした。

舞台は前舞台と奥舞台にわかれ、前舞台は床面の白いアクリルといくつかの椅子で構成されています。この前舞台が基本的な演技エリアになります。奥舞台には白樺林が飾られています。第4幕では、舞台全面に落ち葉がしきつめられて、奥舞台も重要な演技エリアになります。

舞台美術家の島次郎氏はこの装置の模型をつくって、実際の劇場空間に持ち込み、舞台美術のプランを提示してくれました。彼とは何度も一緒に仕事をしていますが、かならず装置模型をつくって美術プランを提示してくれます。

これは、演出家や俳優やスタッフにとっても、とてもありがたいことです。図面ではイメージできない部分も、模型という具体性があるもので確かめることができるからです。演出家は、俳優の動きやミザンセームなどもとりやすくなります。

私も装置模型を横に置いて、照明プランの仕込み図を書きました。仕込み図を書きながら、ちょっと迷ったりした時には装置模型を見て、光の角度や方向のベースになるところを具体的に確認することができました。

床面の白いアクリルへの明かり

舞台装置の中で、明かりをつくるうえで一番のネックとなったのが、前舞台の床面の中央に使われていた白いアクリルです。

俳優の演技を見せるために明かりを当てると、床の白いアクリルに反射して、俳優の表情よりも床面の方が目立ってしまいます。通常の地明かりをつくるように、トップからの明かりを使うことができません。そこで、スポットライトの位置や角度を考え、明かりの反射をアクリルの外側の黒い床面に逃がすように工夫しました。明かりを“ブッチガイ”にして、できるだけ反射を反対側へ逃がすような明かりづくりを考えたのです。

また、照明の色の使い方についても考慮しました。白いアクリルに対して、少し濃い白色系の光を使うことで、アクリルの白さを抑えるように考えたのです。ここで使ったカラーフィルタはリーフィルタの#201です。このフィルタは強い光源だと白く感じ、ゲージを下げると、紫とブルーが混じったようなグレーっぽい感じになります。

このフィルタをベースに使うことで、アクリルの反射を目立たせず、透明感のあるモノトーンの雰囲気がつくれたと思います。

色にこだわる

照明の色については、私自身のこだわりがあります。

十数年前、初めて照明デザインに取り組んだ時に、それまで誰もやっていない明かりをつくりたい、明かりづくりの中に自分の個性を出していきたいと強く思

いました。それが色に対するこだわりとして出てきたのです。その時に考えたのが、よく使われているポリカラーではなく、当時はあまり使われていなかったリーフィルタを使うことでした。リーフィルタを使うことによって、明かりにクリアな感じや透明感を出し、そこに自分ならではの明かりの特徴をつくりたいと思ったのです。

しかし、それは色使いに自分のパターンを決めるということではありません。作品ごとに色の使い方や選び方を考えています。夜の場面でも、その作品によって使う色が違ってきます。カラーフィルタの見本帳をかざしながら、この作品の夜の場面はどんな色がいいのかと考え、いつも悩みながらイメージに合った色を探していきます。

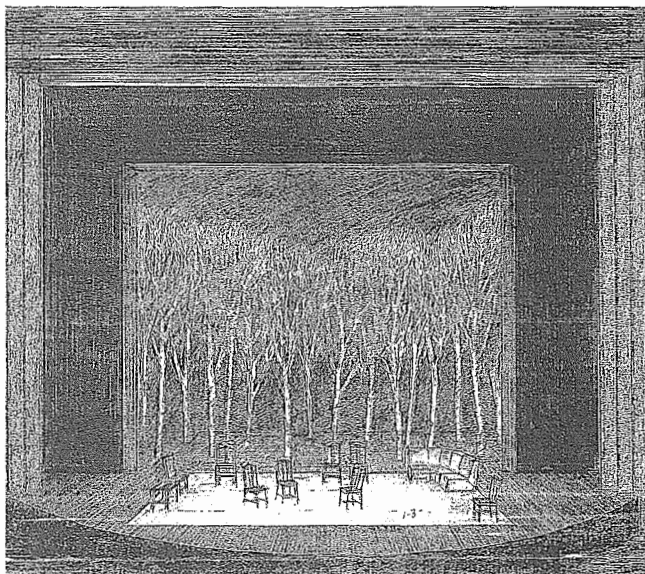
時間をかけて綿密なフォーカシング

今回の仕事で充実感を得られた要因のひとつに、フォーカシングに十分な時間をとることができたことがあげられます。

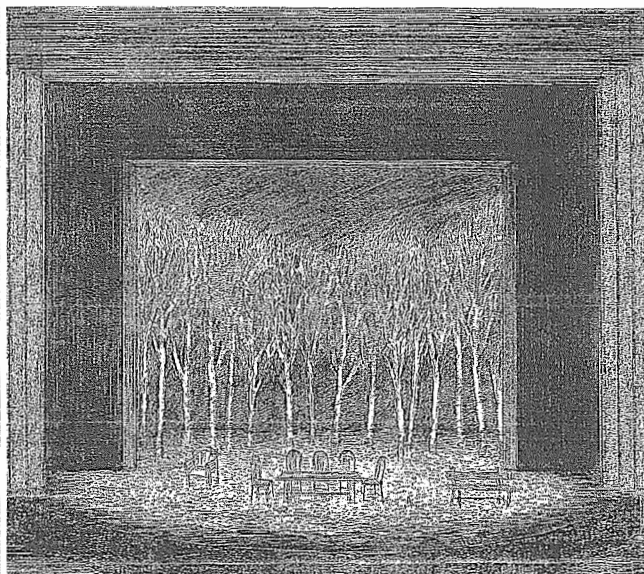
特に世田谷パブリックシアターでの公演では、高いタッパと前舞台と奥舞台で舞台がふたつ分あるような奥行きがありましたので、この広さに対して劇空間をつくるために器材の仕込み量がとても多くなりました。しかし、仕込みや明かり合わせの時間が十分に用意されていたので、丁寧な明かりづくりができたと思います。

舞台照明というのは、フォーカシングがきちんとできているときれいに見えるものです。当たりが適当になっていたり、左右対象であるべきものが微妙にずれていたりすると、気持ちが悪く、違和感を感じ、きれいに見えません。

私はフォーカシングの時は、舞台床面も見えて、全



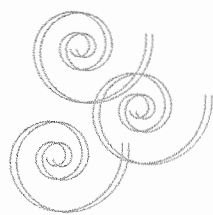
いくつかの椅子と床面の白いアクリルで構成された前舞台と白樺林が飾られた奥舞台



前舞台と奥舞台全面に落ち葉が敷きつめられた第4幕の舞台（舞台美術＝島次郎）

全国大会の開催に携わって

紙谷 邦弘 (山形市民会館)



全国大会を前に

山形市民会館で第45回全国大会が開催されるということで、1999年の2月、第44回の全国大会がおこなわれた鳥取の会場を視察しました。

全国大会の開催にあたって、会館サイドでどのような準備をおこなったのかを事前に把握する必要があったからです。各参加校との打ち合わせの内容、大道具の搬入・搬出・保管について、リハーサルから上演に至るまでの進行について、さらに駐車場の問題などを中心に視察をおこない、担当された会館の方から詳しくお話を伺いました。

この視察で得た内容や、前回大会までの会場館の取り組みを参考にし、当初は、会館のスタッフで照明、音響などスタッフサイドの仕事を全てお手伝いする予定でいたのを、主催者と協議し、地元のスタッフ派遣会社である山形総合舞台サービスの方に現場のスタッフとして参加していただくことになりました。

また、これを機会にして会館の各設備の改修があり、舞台照明設備に関しては、サスペンションライトの回路の増設やサスバトンの電動化などの改修をおこないました。

事務局の準備

全国大会にむけての準備から、リハーサル、上演に至るまでの進行・運営については、大会事務局を務められた地元の高校を中心とする事務局の先生方の努力と、献身的な働きにひとかたならぬものがあったと思います。

特に第45回大会は出場校が例年に比べて17校と多く、ハードなスケジュールを滞りなく、しかも安全性に気を配りながら進めていくのは大変だったと思います。

事務局では安全でスムーズな進行のために、いろいろな準備をされていましたが、リハーサルと本番の時の「進行マニュアル表」(図1・2)もそのひとつです。このマニュアルは、東北大会の時に全国大会を視野に入れてつくられたものですが、非常にきめこまかく進行状況と生徒たちの対応や役割が書き記されており、全国大会の運営に重要な役割を果たしていました。

このほか、「バミリ用テープの色分け表」(図3)などの資料も用意されていて、現場で高校生たちが混乱しないようにと周到な準備がなされていたのが印象に残りました。

	舞台上の動き	舞台統括	上演校 (B校)	各係	計時
1	A校リハ終了	A校のリハ終了します。	上手袖に準備。		↓A校リハ計時
2	各サスダウン	サスダウンをお願いします。	舞台監督と照明担当は舞台中央、舞台統括側へ	舞台スタッフ→サスダウン 照明係→色替え準備	↑ B校リハ計時 ↓
3	B校リハ開始	B校のリハ開始します。			
4	色替え	色替えして下さい。	照明担当は色替えし、終了したサスから報告	照明係→色替えの手伝いをし、終了したサスから報告	
5	トップの調整	トップの調整して下さい。	照明チーフは照明スタッフとトップの大きさど向き調整	照明スタッフ→トップ調整	
6	トップ調整が終わったサスよりアップ	サスアップをお願いします。		舞台スタッフ→サスアップ	
7	装置舞台搬入	装置を入れて下さい。	↑照明担当の一人は調光卓へ、もう一人は照明スタッフの側においてトップのあたりを指示	舞台係・舞台スタッフ→装置の舞台搬入補助 照明スタッフ→トップあたりあわせ	
8	リハ仕込み中	(常に舞台上の状況をみて必要があれば指示)	上演校 舞台監督の指示		
9	リハーサル中	(次校とのリハーサルの打ち合わせをし、終了後舞台袖へ)		進行係→リハーサル終了30分前、10分前にコール 各舞台係→次校とのリハ打ち合わせ	
10	リハ終了5分前		・装置の撤去開始 ・舞台の清掃 ・舞台監督は舞台統括にリハが終了したことを報告	進行係→5分前のコール	
11	B校リハ終了	B校リハ終了します。	B校は全員で舞台に挨拶 C校は舞台上手袖で待機		

図1 リハーサルの進行マニュアル表

	舞台上の動き	舞台統括	上演校 (B校)	各係	計時
1	A校上演終了	装置を撤去して下さい。	・装置の撤去開始 ・舞台の清掃 ・舞台監督は舞台統括に撤去が終了したことを報告	舞台係・舞台スタッフ→装置の舞台撤去補助	A校仕込み計時
2	A校撤去終了	A校すべて終了です。	・A校は舞台へ挨拶 ・B校は上手袖に待機		
3	B校仕込み開始	B校の仕込み開始します。	舞台監督と照明担当は舞台中央へ。 (舞台統括側へ)	照明係→色替え準備	B校仕込み計時
4	各サスダウン	サスダウンお願いします。	照明担当は色替え準備	舞台スタッフ→サスダウン	
5	色替え	色替えして下さい。	照明担当は色替えし、終了したサスから報告	照明係→色替えの手伝いをし、終了したサスから報告	
6	トップの調整	トップの調整して下さい。	照明チーフは照明スタッフとトップの 大きさや向き調整	照明スタッフ→トップ調整	
7	トップ調整が終わったサス よりアップ	サスアップお願いします。		舞台スタッフ→サスアップ	
8	装置舞台搬入	装置を入れて下さい。	↑ 照明担当の一人は調光車へ、もう一人は照明 スタッフの側においてトップのあたりを指示	舞台係・舞台スタッフ→装置の舞台搬入補助 照明スタッフ→トップあたりあわせ	
9	仕込み中 上演5分前 上演2分前	(常に舞台上の状況をみて必要があれば指示)	上演校 舞台監督の指示	進行係→舞台監督に確認の上、上演5分前に1ベル、 2分前に2ベル入れる	
10	仕込み終了	B校の仕込み終了です。	・舞台監督は仕込みが終了したことを報告		
11	上演直前		・舞台監督は下手袖へ	アナウンス係→上演番号・上演校名・作者・題名などを アナウンス。アナウンス終了後、本ベル。	
12	上演開始		・舞台監督は綴帳を上げる指示	舞台スタッフ→綴帳を上げる	B校上演計時
13	上演中	(下手袖に待機)			
14	上演終了		・舞台監督は綴帳を下げる指示	舞台スタッフ→綴帳を下げる	B校仕込み計時
15	B校撤去開始	装置を撤去して下さい。	・1と同じ	・1と同じ	
16	B校撤去終了	B校すべて終了です。	・2と同じ	・2と同じ	

図2 本番の進行マニュアル表

	学校名	バミリテープの色	丸シールの色
上演1	山口県立岩陽高等学校	グレー	赤丸
上演2	千葉県立船橋旭高等学校	黄緑	赤丸
上演3	熊本信愛女学院高等学校	水色	赤丸
上演4	岐阜県立中津高等学校	白	赤丸
上演5	群馬県立前橋女子高等学校	赤	青丸
上演6	明誠学院高等学校	ピンク	青丸
上演7	栃木県立石橋高等学校	オレンジ	青丸
上演8	青森県立青森中央高等学校	黄色	青丸
上演9	東京都立白鷗高等学校	茶色	なし
上演10	久留米大学附属高等学校	グレー	なし
上演11	徳島県立阿波高等学校	黄緑	なし
上演12	山形県立山形南高等学校	水色	なし
上演13	北海道釧路湖陵高等学校	白	なし
上演14	山形県立酒田東高等学校	赤	なし
上演15	兵庫県立日高高等学校	ピンク	なし
上演16	愛知県立半田商業高等学校	オレンジ	なし
上演17	大阪府立長尾高等学校	黄色	なし

図3 バミリ用テープの色分け表

照明の基本仕込み図

舞台照明についても、事務局の先生方が中心になって基本仕込み図 (P.8 図1参照) を作成し、事前に参加校に配布してありました。参加校は各地区大会でつくった照明プランを、この基本仕込み図に書き直して、それをもとに打ち合わせをおこなうことになりました。

最初に基本仕込み図という枠組みを決めてしまった今回の方法が、高校生の自由な発想にとって良かったのかどうかはわかりませんが、私たち会場側としては現在の照明設備の関係上、参加校の要望の全てに応えるには限度があり、それぞれの要望の調整をおこなうためにも、この基本仕込み図は必要なものであったように思います。

基本仕込み図は、演劇の舞台の明かりづくりの基本となる地明かり、斜めとトップからのサス明かりをつくるためのスポットライトなどで構成されており、舞台全体にベタ明かりをつくったり、上手に屋内のセットを組み、下手は屋外の明かりをつくるといった時の明かりづくりにも対応できるものになっていました。この基本の仕込み図に、効果器やスペシャルな明かりが必要な高校は、それを書き込んでもらいました。

現場に来ると、図面上と現場の違いに多少戸惑いもあったようですが、この基本仕込み図に対する理解度はあったように思います。

本来ならば、全国から選ばれてきた学校の舞台ですから、それぞれ学校ごとの仕込みができればいいのですが、会館の設備や条件上、現実的にはむりなので今回はこうした方法を採用することになりました。

大道具について考える

大道具についても、苦労された学校があったようです。この会場は袖幕で間口を狭めることができない構

造になっていますので、自分たちのセットや演技空間に合わせて舞台空間を設定することがむずかしくなっていました。地区大会で使った大道具がそのまま使えないため、この会館の間口に合わせて作り直さなければならぬという問題があったようです。

また、舞台袖のスペースがあまりなく、搬入口も狭いため、大道具の準備や出し入れが大変でした。大道具の保管場所として、近くの小学校を借りて、トラックで搬送するなどの処置がとられましたが、そのために裏のスタッフの苦労もありました。

基本的に、リハーサルや本番の時の搬入・組み立て・ばらし・搬出などの作業は生徒たちがおこない、私たちスタッフは手を貸してはいけないという決まりがありましたので、制限された時間のなかで、生徒たちが大道具を運び込み、組み立てる作業を内心ではひやひやしながら見ていなければならず、これは精神的にも大変なことでした。特に、生徒たちの道具の組み立てに、強度的な不安がある場合などはなおさらです。

リハーサルの進行を見て

リハーサルの進行状態を見ていると、規定の時間に大道具を組み立てるだけで精一杯というところもあったようです。

リハーサルというのは、大道具を組み、明かりを合わせて、音出しと音量の調整をして、さらに重要な部分の演技と明かりや音とのきっかけ合わせを確認することが目的です。その時間が、大道具の仕込みだけで終わってしまったら、不安なまま本番を迎えることになります。

限られたリハーサル時間ですから、時間の配分をあらかじめよく考え、きっかけ合わせまでできるように準備しておくことが必要です。与えられた時間から逆算して、大道具の規模や仕込みの量などを考えていくことも必要でしょう。

全国大会に出場するということで、県大会や地区大会で使った大道具に、さらに手を加えて凝ったものにしてもらったため、大道具を飾るために時間をとられている学校がありました。全国大会だからといって、大道具に凝るよりも、かえって簡素化していった、ほんとうに自分たちが表現したいことを、きっちりをつくっていく方が良い結果が得るのではないかと感じました。

今大会では、仕込みの時間がオーバーして審査の対象外になった高校があったようですが、これは本当に残念なことでした。

作業をスムーズに進めるために

また、リハーサルがスムーズにいかない理由のひとつに、演出担当の生徒や顧問の先生に対して、ほかの生徒たちがひとつひとつ作業の過程で確認をとるために、進行が遅くなっていることがあります。

照明でも、照明担当者の責任で明かりを先にどんどんつくっていったら、できあがったところで、全体を流しながら修正をおこなうとよいのですが、ワンシーンをつくるたびに「これでどうですか」と演出や先生に確認をとっています。その時に、「ちょっと待って、音響さんの音を聞いてから」という返事が返ってくると、もうそこで照明の作業は中断してしまいます。これでは貴重な時間が無駄になってしまいます。

指揮系統はできていて、仕事の分担もあらかじめ決めてあるようですが、判断をしたり、指示をするチーフが1人しかいないため、作業をする生徒が指示待ちのような状態になって、作業が滞り、時間のロスをしていたようです。みんな一生懸命に取り組んでいるのですが、その一生懸命が空まわりしているようにも思えました。

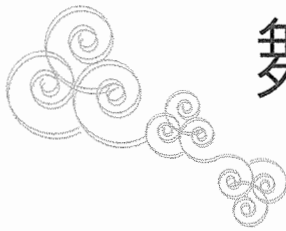
課題を講習会に役立てる

こうした問題点に対して、どうアドバイスや手助けをしてやれるのか、今後の課題として残りました。

今回のような全国大会では、基本的に全て生徒の手によっておこなうことが決まっていますし、時間的な余裕もない状態ですから、とにかく事故がおこらないように、スムーズに進行できるように目を配ることで精一杯です。

当日の現場ではアドバイスなどできる状況ではなかったのですが、そこで気づいたことを今後の地元での指導のなかで生かしていければと思っています。

私たちの地区では、中央公民館などの施設を利用して、山形市内の高校生や中学生を対象にした講習会を毎年おこない、演劇部の新入部員が数多く参加しています。この講習会では、実際に照明器具に触れてもらい仕込みを教えたり、明かりをつくってもらったりしています。また、照明だけでなく、音響の音出しや、平台の組み立て方など、舞台づくりに関わるさまざまな作業を実際にやりながら、知識と技術を身につけてもらっています。全国大会で、高校生たちの舞台づくりに間近に接して、その熱心さと同時に問題点に触れることで、こうした講習会の意義と必要性をいっそう強く感じる事ができたように思います。



舞台照明から見た全国大会

安部 正則 (山形総合舞台サービス)

基本仕込み図をもとに打ち合わせ

山形市民会館での全国大会の舞台照明を担当することになり、1999年の4月に各出場校との打ち合わせをおこないました。

この打ち合わせでは、運営事務局から事前に渡された基本仕込み図(図1)に、それぞれの出場校が必要な色や器具を書き込んだものを資料として持参していましたので、その図面をもとにしながら細部を確認していくという形になりました。また、基本仕込み図と一緒に会館にある効果器具の種類や台数も知らせてあったので、学校によってはそうした器具を吊って欲しい位置なども仕込み図に書き込んでいました。

色についての指定は、回路ごとに使いたい色を記入している高校もあれば、細かいところからわからないのか、打ち合わせの時に「全体的にこんなトーンにしたい」とイメージを言うところもありました。生徒たちのイメージを聞きながら、「色を入れないで生明かりのままでもいいでしょう」とアドバイスしたり、実際に色を見せて「薄いブルーなら、こんな感じでいいですか」と確認しな

がら明かりのプランをつめていきました。

打ち合わせでは、舞台照明についてこまかいところまでわかっている学校もあれば、県大会や地区大会の時は、上演した会館の方にアドバイスを受けてつくったけれども、今回はどうすればいいのかと相談してくるところもあり、学校によって知識や理解度のレベルに違いがあるなという印象を受けました。

総合仕込み図の作成

次は、各学校からの基本仕込み図を1枚の総合仕込み図にまとめていく作業になります。

基本的には、各学校が要望する明かりをなるべく再現できるような仕込みをと考えましたが、会館のサスの回路数やフロアの回路数なども決まっています。「パーライトを追加したい」「斜めからの角度はこの角度からにして欲しい」といったさまざまな要望には、全体の兼ね合いのなかで共用できる部分は使い回しをして、どうしても単独で必要なものは、それに応えるように配慮しました。しかし、シーリングから“ヌキ”で特定の人物をとらえたいという要望に対しては、シーリングの

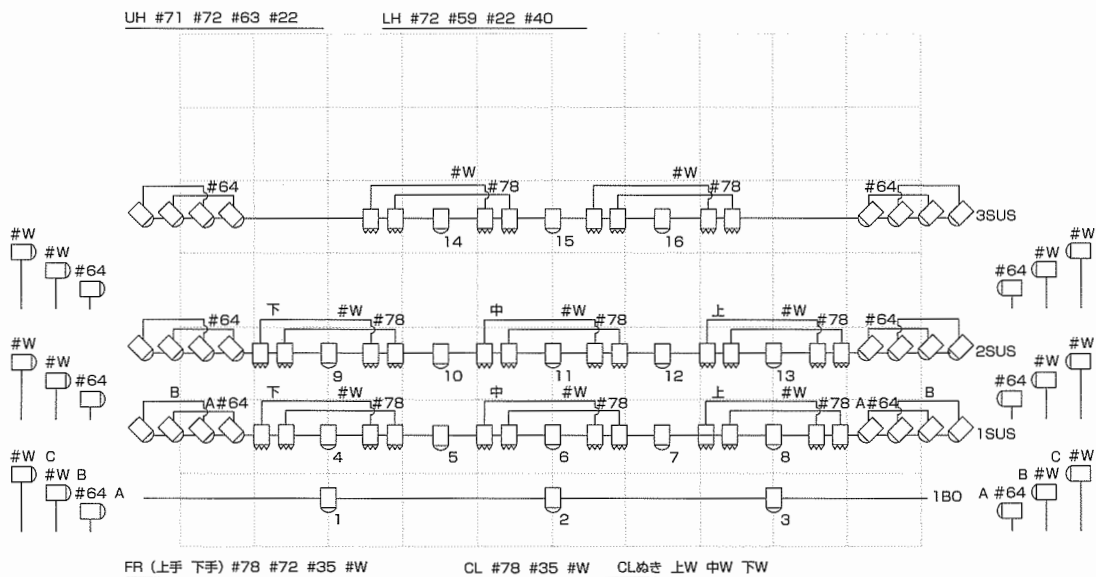


図1 基本仕込み図

回路の都合でどうしても応えることができませんでした。センターからのフォローピンは、光の質が違い、明かりが動くことによって舞台全体の明かりと違和感が生じることがあります。それを避けるためにシーリングからのスポットライトで人物を狙いたいという意図がわかるだけに、実現させることができずに残念に思いました。

最終的に総合仕込み図(図2)では、4サスを増やし、パーライトなども追加しています。また、4サスから使用しないサスの回路をマルチケーブルで立ち降ろし、灯入れなどステージ周りの回路として利用しました。

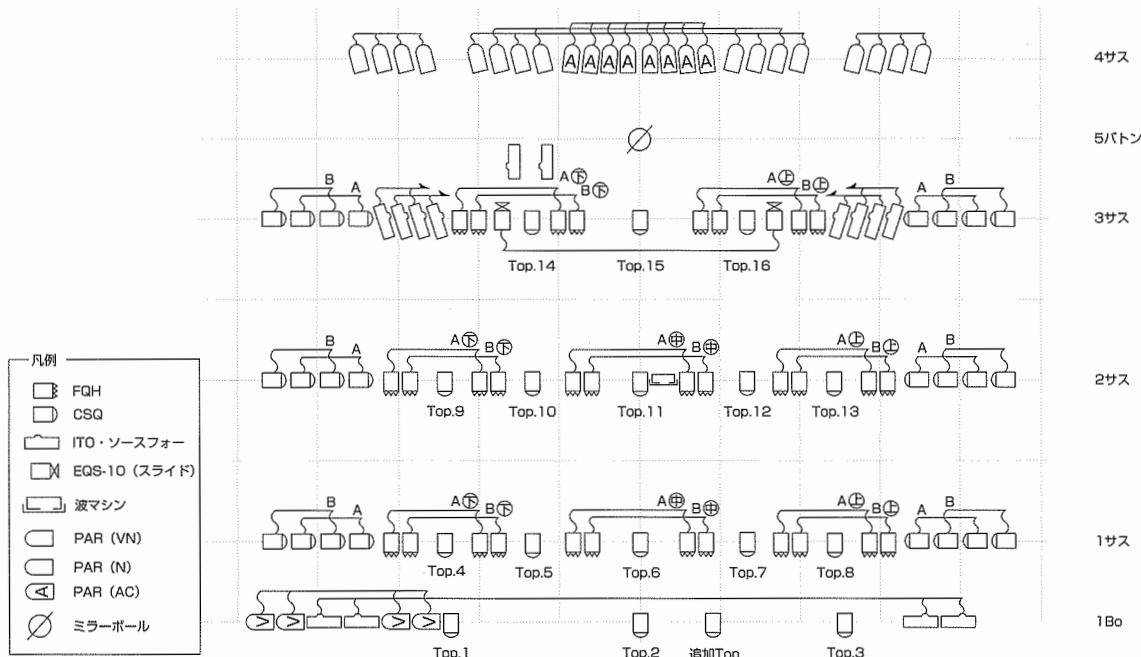
今回の仕事では、あらかじめ基本仕込み図をもとにした各高校の仕込み図が資料として揃っていたので、全体のプラン(総合仕込み図)をまとめるのにとっても助かりました。それぞれの学校の地区大会の時の仕込み図をそのままベースにして、会館の設備に合わせてまとめることになったら、とても大変だったろうと思います。

照明の仕込みと明かり合わせ

照明の仕込みと明かり合わせは、限られたリハーサル時間(本番では仕込みの時間)の中でおこ

第23回総合文化祭 演劇部門(吊物)

星球 ← 8ボタン



第23回総合文化祭 演劇部門(ステージ)

UH 71. 72. 63. 22

LH 72. 59. 22. 40

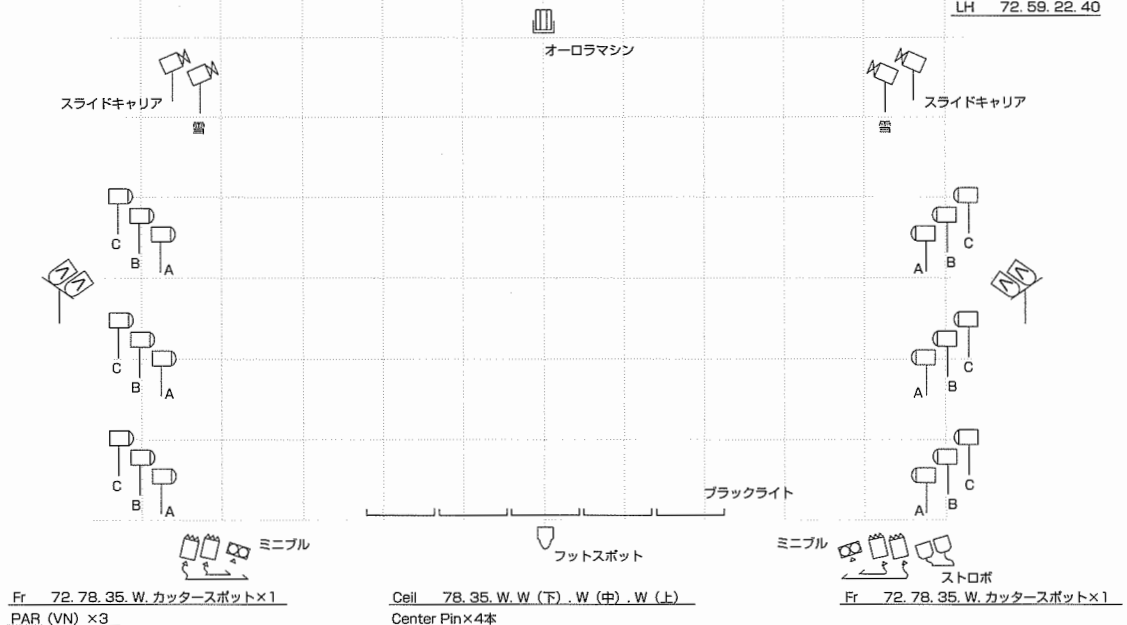


図2 総合仕込み図(上・サスボタン/下・ステージ)

なわなければなりません。

基本的には、生徒たちは照明器具やバトンの昇降装置などには触れませんので、私たちスタッフが作業をおこない、実際に明かりを出して見せて生徒たちの確認をとる必要があります。

作業の手順は、まずサスバトンを降ろし、色入れを生徒たちにやってもらい、色入れがきちんとできているかをスタッフが確認した後、サス明かりのフォーカスや当たりの調整をおこない、生徒に確認をして、OKが出たところでサスバトンを1本ずつ上げていきます。大道具が飾り込まれると、サスバトンを再度降ろして調整することはできません。また、ここで作業の時間をとってしまうと、生徒たちにとって貴重なリハーサル時間（本番では仕込みの時間）が少なくなってしまいます。これまで現場で培った経験を生かして、できるだけ素早く仕込みや明かり合わせができるように、神経を集中して作業を進めました。

調光室での作業

照明操作は基本的に生徒たちがやることになっていました。リハーサルの時に、あらかじめつけてきてあるフェーダのデータ表をもとに、生徒たちがフェーダを上げて実行明かりをつくり個々のレベルを確認して、修正していました。調光卓に記憶して再生する場合、それを私が記憶に入れていきます。本番での操作は、トータルクロスフェーダで再生する学校もあれば、サブフェーダの20本で操作した学校もありました。

ここでも、学校によるレベルの違いを感じました。県大会や地区大会では、記憶卓を使ったところ、3段のプリセットフェーダでマニュアル操作をしたところ、あるいは会場の方針で操作卓に触らせてもらえなかったところなどさまざまだったようで、その環境の違いが、照明操作卓への対応にそのまま出ていたように思います。

フェーダ操作を見ても、きっかけや明かりの変化へのこだわりはまちまちで、大雑把に見えるようなところもあれば、フェードインやフェードアウトにとっても神経を使っているところもありました。これは、芝居の内容（演出）に対する、照明の変化の表現方法の違いかもしれません。

ホリゾントの色の修正

学校によっては、ホリゾントの色に苦労してい

たところがあったようです。ホリゾントは、使われているランプの種類やW数など会場の条件によって、同じ色を入れて、同じゲージにしても染まり方が違います。

このため、地区大会の時と同じようにつくっているのに、ホリゾントの色が微妙に違って、その修正に戸惑っているところがありました。ホリゾントの色の修正に、アッパーホリゾントやローアホリゾントに使っている色を少しずつレベルを変えていじっていくため、色がだんだんくすんでいき、ますます混乱してくるのです。

ホリゾントの修正は難しいのですが、使っている色の全部にゲージをかけると、ランプそのものの光が、白色から暗く赤い色となり、全体がくすんでくるので、主になる色を100%で出して、その色に従になる色を少しずつ加えていくといった方法がよいでしょう。

たとえば、アンバー系の夕焼けの場面などでは、#22をまずフルで出して、カラーフィルタの色をきちんと出します。それに#40の色のフェーダを足していくと感じが出てきます。もし、#33や#W（フィルタ無し）がある場合、それらをプラスすると、また違った感じの色が出ます。

できあがった照明の検討を

この大会では、舞台の成果に対して審査がおこなわれるのですが、その際に舞台照明については全体の割合の中で最重視されていないように感じました。上演が終わった後に、舞台照明についての検証やアドバイスをする時間があると、今後の参考になるのではないかと思います。

実際に、生徒たちの要望でITOやパーライトを使った明かりを見ると、その器具の長所を最大限に引き出して使用していたところもあれば、逆に生かされていなかったところもあり、器具の特性理解の仕方もまちまちだったようです。演目によっては、もう少し明かりを追加してあげたら、もっと効果があがったのにと思えるところもありました。

たくさんの機材を使えば使うほど、必ずしも良い明かりができて、良い舞台ができるというものでもありません。

今後効果器具などは使われる方向にあると思うので、使い方や効果について検討や講習会などがおこなえたら、舞台づくりのプラスになっていくのではないかと思います。

奇妙なこと

松本 修

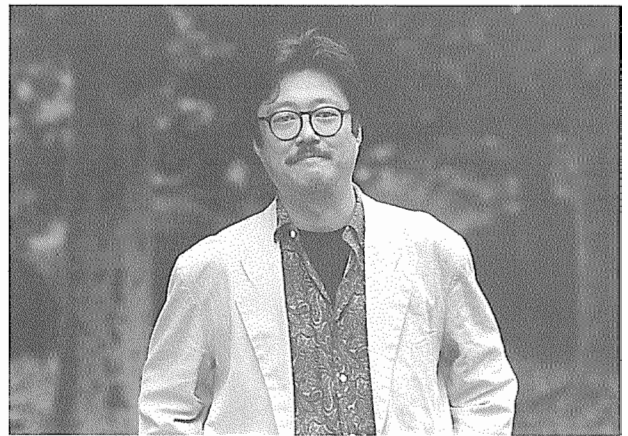
99年は久しぶりに高校演劇の大会の審査員を引き受けた。夏と秋の二回だ。一度は山形市で行われた全国大会、二度目は岡山の高梁市での県大会。その両方で、私は「奇妙な光景」を目にした。いわゆる「暗転」による場面転換のシーンだ。正確には場面と場面をつなぐのだから、それはシーンとは呼ばないのだろうが、客席にいる私たちからは舞台上で行われていることが「まる見え」なのだ。だから、やはりひとつのシーンと呼んでも差しつかえない。ありゃ、いったい、何なのだろう？

日頃、高校演劇を見ている人にとっては、驚くに値しない、見慣れた光景なのだろう。つまり高校演劇の発表の場である体育館や会館やホールでは「完全暗転」ができない。故に、舞台上の役者やスタッフは「暗転のつもり」で事を進行させるしかない、ということなのだ。他からは見えていないという「つもり」で、実はしっかり見えている、というまやかし。まるでピーター・シェーファーの『ブラック・コメディ』のようだ。舞台上は、それでも、実際にはかなり暗いようで、道具を移動させているスタッフと役者がぶつかったり、板付きの役者が立ち位置に貼ってあるはずの目印（場ミリ）をウロウロ探しまわったりしている。あれはあれでなかなか微笑ましいと言えなくもないが、やはり変だ。だって見えてるんだもの、こちらには。暗くする必要ないじゃん。

数年前に初めて高校演劇の審査員をやった時も、同じような光景を目にしたのだが、その時は、単に「ああ、この会場は暗転に対応できないのだなあ」という程度に考えていた。しかし、今年、初めて「全国大会」の客席に座ってみて、あ、これは高校演劇の暗黙の了解なのだ、と気がついた。同じ審査員席の長年高校演劇に携わっている先生に「あれは、いったい何ですかねえ」と聞いてみたところ、「ええ、たしかに妙なんですけどね……。まあ、仕方がないんじゃないですか」という答えが返ってきた。そして「あれは、見えないものとして、見てあげて下さい」と言われた。他の審査員も「そう、そう」という感じで、軽く流されてしまった。私は最近オトナになったものだから、それ以上は話さなかったけれど、やはり、あれはどう考えてもおかしなことだ、と思う。

「まる見えじゃん！」と叫ぶ「裸の王様」の少年は、今までいなかったのだろうか？

演劇はたしかに「約束事」で成立している表現である。「約束事」を了解した上で「嘘」を楽しむ遊びだ。そうであるからこそ、その「約束事」に関しては慎重であるべきなのではないだろうか。まず、慣習で行われている演劇の手法＝約束事を疑ってみることから始めるべきだ。「これは何のためにある手法なのか？」「それはどんな効果があるのだろうか？」「それは自分たちの舞台表現にとって果たして必要なものだろうか？」とひとつひとつ確かめてみる。もし、高校生はそんなことを考える必要はない、という意



(まつもと おさむ) 1955年、札幌生まれ。演劇集団MODE主宰。演出家。1997年より世田谷パブリックシアター契約演出家。代表作に『わたしが子どもだったころ』『きみのともだち』『ガリレオの生涯』『夢の女』など。

見があるとしたら、それは大間違いだと思う。高校生だからこそ、演劇の初心者だからこそ、そこをちゃんと考えておかなければならないのだ。

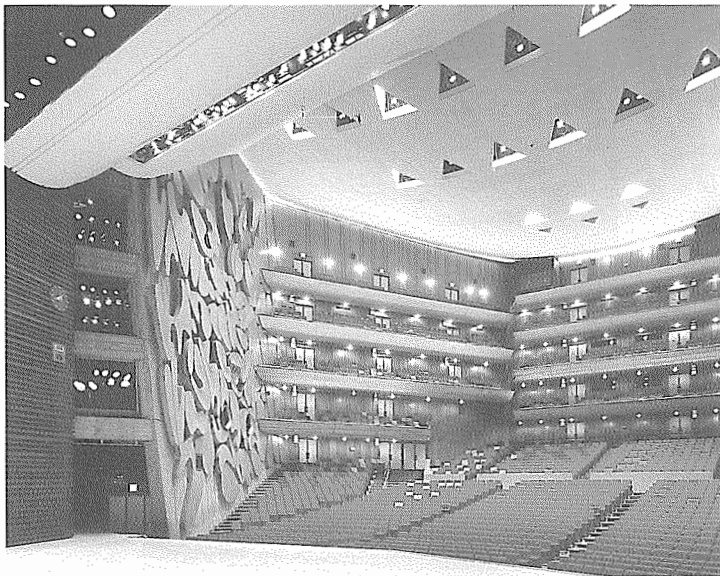
あまりにも「既成の演劇」のイメージに向かって作られている高校演劇が多すぎる。貴重な青春をコピーに費やしていいのだろうか？

で、具体的には、まず第一に、「暗転」の中での転換や板付きが、客席からはまる見えであることが事前に分かっているのなら、「暗転」という手法は断固として使うべきではない。下手な嘘、嘘の上塗りはいけぬ。例えば、完全暗転が成立しているプロの舞台だって、客のほとんどは「ああ、この暗い時間の中にセットを変えたり、役者が引込んだり、出たりしているんだな」と思って観ているのだ。再び、明りがついた時「ワッ、変わった！」と驚いたりする客を見かけたことはない。予測を越えた大転換や早変わりに観客がホーッと感心することはあるが、それは作り手が約束事を熟知し、約束事と戯れているということだ。例えば、約束事を裏切ったりとか……。

第二に、たとえ「完全暗転」が条件的に可能だとしても、安易に「暗転」を用いるべきではない。時間や空間を限定した中で、どれだけ時間や空間の広がり観客にイメージさせることができるかが、演劇の面白さなのだ。どんなにセットで表現しても、そこは所詮、劇場（体育館やホール）であることを忘れてはいけない（と、プレヒトも言っている）。便利に「暗転」を多用している舞台を次々と見てみると、ああ、演劇というのは、だから多くの人に支持されないのだなあ、と思ってしまう。だってえ、お約束事が分からないから、カッターインだもーん。

ことは、会館やホールの設備や機構、はたまた消防法の問題ではない。ものを作るということはどういうことか、演劇とはどういう表現か、といった根本的教育が、実はちゃんとなされていないのでは、といささか不安になった高校演劇の体験であった。

東京文化会館



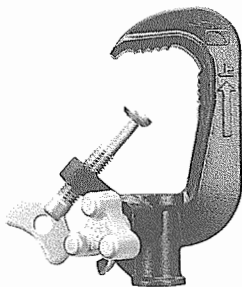
●所在地=東京都台東区上野公園5番45号

東京都の開都500年記念事業として1961年4月に建設された東京文化会館は、東京都のみならず日本を代表する舞台芸術の発信基地として、国内はもとより海外からの舞台芸術家が数多く訪れ、オーケストラの演奏会、オペラやバレエの公演などで歴史に残る舞台を展開し、日本における舞台・音楽芸術の振興と発展に寄与してきました。この東京文化会館が、その歴史と実績を踏まえながら、劇場としてさらに次時代に活躍していくために新しく生まれ変わりました。今回のリニューアルでは、歴史の中で蓄積されたものを生かしながらも、今後さまざまな形で試みられる舞台表現の多様性を視野に入れながら、劇場の機構・設備の一層の充実が図られています。なかでも舞台照明設備の面では、さまざまな舞台表現の実現に対応するために最新のマリオネットスター調光システムをはじめ、シューティングシステムやムービングスポットライトなどの最新技術が導入されました。

MARUMO新製品ニュース

新型ハンガー HAS-3

東京文化会館の舞台照明設備の刷新にあたり、締め付け力を強化し、仕込み時の効率化と安全性、使いやすさを向上させた新型ハンガーが開発されました。新型ハンガーは、パン固定ハンドル、落下防止ネジ、締め付けボルトが同じ方向に配置され、手を反対側にまわさずに、同じ方向から作業ができるように設計されています。また、この新型ハンガーはφ17のダボに対応しているため、従来の灯具を改造することなく使用できる汎用性を備えています。



新型ハンガーの名称と特徴

パイプ押しネジ

ネジピッチを細かくし、パイプの締め付け力を強くしました。また、空ネジ部を長くし、少しでも締め付け時に回す回数が少なくなるように工夫されています。

締め付けボルト

従来品と比較して、ツマミを大きくし、締めやすい形状にしました。

舞台・スタジオ用取付機材を表すマークです。



落下防止ネジ

パン固定ハンドル、抜け止め蝶ボルトの脱落を防止します。いっぱいまでゆるめても脱落しないよう工夫されています。

パン固定ハンドル

ネジピッチを細かくし、締め付け力を向上させました。また、ハンドルの形状を見直し、締め付けやすい形にしました。

編集室では、読者の皆様からの質問や情報を募集しています。ご意見やご要望も併せて、編集室までお寄せください。

●光の質問箱/学校などでの舞台づくりのなかで、ぶつかってしまった舞台照明に関する疑問、難問をお寄せください。一緒に解決策を見つけましょう。

●話題の舞台の照明プランを探る/印象に残った舞台作品や照明プランをお知らせください。デザイナーから直接話を聞きます。

●ワークショップ情報/全国各地でおこなわれているワークショップ情報をお寄せください。編集室で取材し、全国の読者に紹介していきます。

MARUMO LIGHTING NEWS

●「マルモ・ライティング・ニュース」は、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は丸茂電機機までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。